

第3節 箱清水遺跡の意義

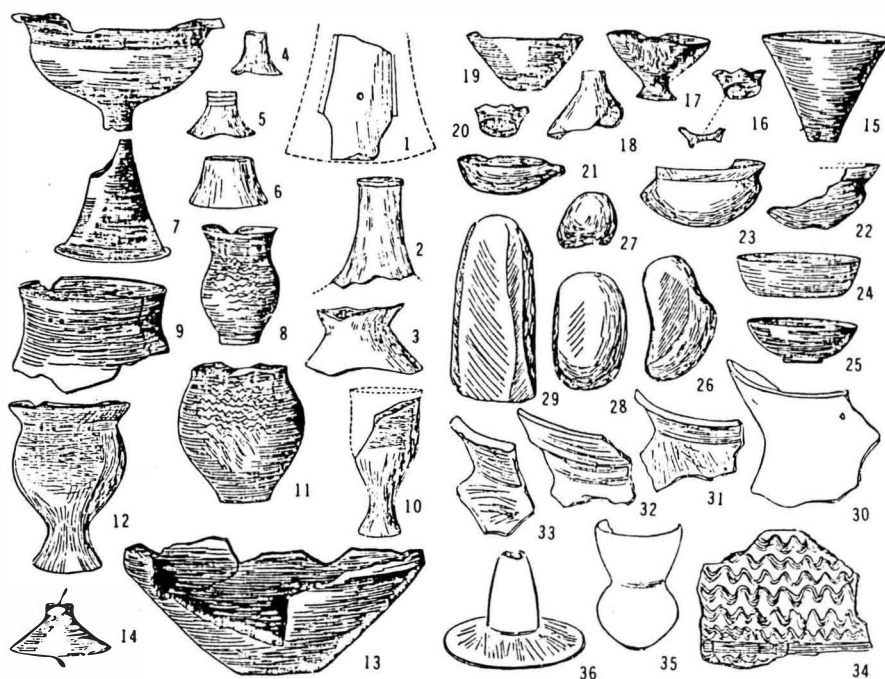
日本考古学において、弥生文化の研究は東京本郷弥生町の向ヶ丘貝塚で口頸の欠けた壺が発見された明治17年に遡る。それが報告されたのは明治22年4月の東洋学芸雑誌91号で、この時は単なる石器時代の土器として取りあつかわれている。その後、26、27年に同種土器の発見があって、縄文土器とは異なるらしいとされ、29年に蒔田鎗次郎氏が「弥生式に就て」を人類学会雑誌122号に発表している。その後の進展だが、29年には蒔田論文をふくめて2編、30年に2編、31年に1編、33年に2編といった状態で、資料の蓄積は甚だしく低調だった。そこへ34年に至り9番目の「箱清水遺跡報告」がだされ、ここに至って弥生式土器はようやく自らの位置を得た。森本六爾氏は「弥生式土器研究史」の中で、「明治30年代に入りますと、当時の仮称『弥生式土器』は西南方は南九州から、東北地方は陸奥にまで及んでいることが知られ、その発見国数も約30か国に達する有様となって参りました。殊に長野市箱清水にある高等女学校の敷地から、一遺跡にして数百コの土器を出したという事実は一層この弥生式土器に議論の花を咲かせる結果となりました。」といかに箱清水遺跡の発見が弥生文化研究上重要なエポックであったかを述べている。

この最初の報文というのが明治34年10月20日の東京人類学会雑誌187号、35年1月20日同誌190号に掲載された蒔田鎗次郎氏の「長野市に於ける弥生式土器の発見」、及び37年2月20日同誌215号掲載の玉置繁雄氏による「長野市で見た弥生式土器」で、これによると、長野高等女学校々長渡辺敏氏が東京帝大の坪井正五郎博士に調査依頼を行い、博士は34年9月はじめに来長して遺跡視察後に講演を行っている。博士はこの遺跡が弥生遺跡だということで、当時同土器を追求していた蒔田氏に再調査を命じ、蒔田氏は9月19日に箱清水遺跡に臨んでいる。

「長野市に於ける弥生式土器の発見」—蒔田鎗次郎—

(『東京人類学会雑誌』187・190号掲載)

長野縣長野市に今回多数の石器時代の土器が発見されたとのことで坪井先生が佐渡旅行の帰途御立寄になったのであるが、其は彌生式土器の類品であったので、予に取調よとの仰であったから、去月18日東京を去って長野へ向ふた。予は直に土地の熱心家なる高等女学校々長渡辺敏氏を訪問して、氏の採集に係る總ての土器を一覧し、翌日は氏の案内で其発見地と云ふ字箱清水の高等女学校敷地へ行ったのである。此地は善光寺門前を左へ戸隠道をなだら上りに漸々2・3町登った所で、旭山、郷路、往生寺、大峯の諸山其西北を蔽ひ、東南は廣茫たる平野で、即ち長野市の存在する所である。由來箱清水なる地勢は、前世期に於て非常なる大洪水でもあって形成せられたかの如き水成岩質の丘陵であるから、彌生式の遺跡とも云ふ可き豎穴は東京に於ての如く區劃判然せず殆んど石器時代の包含層の如くである。現在露



第13図（第1圖）蒔田・玉置論文掲圖土器

はれているのは少かに1ヶ所で、其も坪井先生の仰で残されたので此れは餘程大きく長さ5間程に深か2尺ばかり矢張り圓形で最早中心と思はるゝ所は掘り取られたと見へて、予が発掘の時は少量の炭及び土器の小破片丈けであつた。其他猶ほ穴と思ふ所も有つたが時日に制限があるので一先づ中止したが、從來発見された遺物に就て取調べ得た結果を述べ様と思ふ。

土器の多くは破片であるから全形を認むべき物は實に少数である。然しこれを大凡に分類せば左の如くなる。

（臺付きのもの）皿形、コップ形、瓶形あり。

（碗形のもの）平底、糸底あり。

（漏斗形のもの）有孔と無孔あり。

（深皿形のもの）平底、糸底、有孔、無孔とあり。

（瓶形のもの）

其他手掛ある茶碗形土器、石器及び焼ヶ麥、焼ヶ木等もあつた。

（第1圖）(1)は豎5寸横巾廣き所で2寸8分左右の側（内側點線ある所）に切込あり且つ中央には圖の如く1個の突き孔がある内外共に總朱塗りで之は大なる高杯の臺の破片であつて切込は即ち祝部に能くある透しの類と思はれる中央の孔は未だ例がない實用とも考へられねば矢

張り装飾の一つであらふ、外線は其臺の形狀を示すのである(2)、(4)、(5)、(6)、及び(3)は臺の種類なり(3)、(6)を除く外は總て朱塗りである(5)は杯の着け際に圖の如く三段の高まりあり此れは未だ類品を見ない。

(7)は高さ凡1尺5寸杯の直徑1尺2寸其質堅く全体朱塗りで美麗なる光澤を有す此れは今回発見中の優品であるが若し1圖の全体が完備してあったならば恐く其右に出るであらふ。

(10)は高さ凡4寸上部は欠損すれど其形狀は先づ點線を以て示すが如くならんか胴部には不規則なる波紋がある其色は帶褐黒で最も粗造なれば若し1個で発見したならば或は石器時代の土器の如く考へられる。

(12)は高さ凡5寸口徑4寸なり頸部の周圍には横に長短の5線があつて其上下には(10)と同じく不規則な波紋が畫かれてある東京近傍には多く此の類品を出す(但し飾りある物は少し)。

(24)は高さ2寸口徑4寸5分深き皿形をなす内部は總て黒塗りなり。

(8)は高さ4寸2分口徑2寸8分全体に波紋及び頸部に横線ある事(12)と同じ。

(22)は縁厚く肩部を著しく突き出て底部へ急に斜面をなす全体朱塗りにて底は上げ底なり。

(25)は薄手にて最も巧なる製作なり而して底は糸底である。

(9)は口徑1尺2寸總朱塗で口邊に近く圖の如く相對して2個の突き孔がある其質堅く全体は頗る大なる物であらふ。

(13)は胴部より上を失へり故に全体を知る事は出来ないが現存部はすり鉢の如く上の欠け口に著しき角度あり廣き所で直徑凡2尺總朱塗りなり(9)の口部は或は之に附属するかも知れないが中央部がないから不明である。

(23)は高さ2寸5分、口徑凡5寸(22)の類品なれど縁部薄く肩より底へ漸々丸みを持つ底部には徑6分程の大孔がある。

(11)は上部全く欠損す現形の高さ6寸8分頸部に横線あり又波紋ある事(11)、(12)の類なり。

(15)は漏斗形のもの之に有孔及び無孔とあり口徑凡5～6寸。

(21)は口徑凡3寸高さ1寸4分側面に6分程の手掛と思はる突起あり内外共に總朱塗りなり猪口の類にてもあるか。

(19)は茶碗形のもの口徑4寸高さ2寸外部は朱塗りなり。

(17)は最も薄手の製作にて全体に細かき刷目あり口徑4寸高さ2寸3分程。

(14)は高さ1寸6分下部直徑3寸3分外部は朱塗りなり其形笠の如く内部は矢を以て示すが如く上下へ貫通してをる予は何れかに屬する蓋の類と思ふなり。

(18)は(14)の類品なり左れど内部は貫通せず朱塗りにて高さ2寸4分程なり。

(16)、(20)は餘りの小破片で蓋の類なるや將た底部なるや判然しない只(16)は一つ(20)は五つの中央に小孔がある。

今回発見中の主なる土器は先づこんな物である其他彌生式の特徴ある大瓶形の大破片も有ったが後は小破片で別段記する程の品もない今此等の土器を東京邊のと比較して見よふならば

非常に精巧の者あり又劣等の者がある素より地方によりて其製作を異にするのは當り前の事で石器時代に於ても亀ヶ岡式と云ふ様な者である殊に今回の調査は面白く未だ發見されない者が澤山ある。(1)、(2)、(5)、(7)、(10)、(22)、(25)、(23)、(13)、(21)、(14)、(18)、(16)、(20)、及其他石器の類である。就中(7)の如きは東京邊の彌生式の類とは全く思われないが去りとて又古墳からこんな朱塗の土器の出た例も聞かない又(14)、(18)が、予の云ふ如く或る器物の蓋であつたならば人類学教室にあるジャヴァボルネオ邊の焼き物に能く一致するのである。

模様の類は餘り見受けない先づ(10)、(12)、(8)、(11)位の者だ又今回は有孔の者が割合に多く出た(1)、(9)、(23)、(12)、(14)、(16)、(20)の類で(1)は裝飾(9)は實用(20)は現今の漏斗の如き用に供したるものか(14)、(16)、(20)は息き出しの爲めとでも云ふ可きか左れど(23)の孔に至ては更に其用を知るを得ない。

總て今度の發見は小形の物が多い様であるが小形程欠けぬので大形の物も数多發見されて居る何れも破片で底部に依て漸く知る事を得るので其最大なる物は直徑4寸2分もある又最小なるは直徑1寸餘りなり。

次に彌生式の穴から數個の石器が發見されたのは今回が初めて、ある其形狀の異なりたる物4個に就て左に述べよ(29)は断面が3角形の石器で其角の3面が磨かれ(27)は下部が凹狀に(28)は左側面が何れも磨かれてある(26)は其形磨製石斧の如くなれど刃部丸く磨かれ決して刃として用ひられたるものではない以上の石器は或は石器時代の品と稱するも其判別出来ないが(26)圖の如きは確に一つの特徴がある予は此等の石器は土器製造の爲に造られたのであろふと考へる。

以上の發見品に依て此の遺跡とも云ふ可き堅穴に附て大に研究する所があつた予は此の穴の或る者が焼け麥、炭、灰、及石器などの發見から見ると確に其の1部は土器製造場處として用ひられた事が推察出来る。

終に一言すべきは此の彌生式土器が古墳時代の前或は後に属すべき者か將た又並び行はれたるかは最も研究を要すべき問題であろふと思ふのである。

編者曰く此遺跡の事に關しては曾て長野中学の野津左馬之助氏より坪井埋科大学教授へ信書昨年9月4日附けを寄せられし事有り。一説として之を左に附記す。(前略)却説一昨夕は御來長且つ御講話をなされ候趣傳承致居候へども折悪く他出中拝顔の榮を得ず遺憾此事に御座候承れば其節高等女學校敷地發掘の彌生式土器につき御講話なされたる趣に候處右發掘土器の多分は渡邊該校長の手許に有之御一覽の事と存候小生も生徒より贈與くれし破片又自分採得せるものをも所持致居候彌生式土器に付ては兼ねて愚考も有之候事故生徒兩3名引き連れ再應探訪候結果左の數品を拾得候。

1、土器

甲、朱を塗りしもの。

乙、朱杯塗らざる浮紋土器にて普通諸方にて發見する物、此式に屬するものは該地のみ

ならず此所を去る2～3丁の畠地よりも度々發見す。

2、石器

甲、打製 1個。

之又北佐久郡邊にあるものと同質同式のもの。

乙、磨製 1個。

之又同斷半は折れたるものにて齒の邊使用せる結果として著しく磨滅せり。

3、石鏃及び其材料 數々 普通のもの。

4、緑玉 1個。

5、渦紋土器破片 數個。

右は凡て現在の儘なるを拾ひしには無之人夫の掘出せる跡又は運土の堆積中より得しものに候第三紀層の上に凡そ一尺計りの黑色糞土ある其中より重に得たるものにて候。

元來彌生式土器なるものは未だ學者間に一定の見解も無之様に候へ共小生の卑見にては(重に信州地方に於ける現状より推測して)矢張りコロボックル人の製作物なれども彼等人族の末期に際し大和民族の膨張の爲め相接觸し其結果として兩人族の製作法及び其式を混合せるものとの考にて御座候。(下略)

この報文によると、幾つかの竪穴住居址があって、その中には火災による廃滅で炭化した麦の出土のあったことがわかる。又、蒔田氏の調査に先んじて行なわれた長野中学校の野津左馬之助氏の調査によると少なくとも基盤層までは30cmの堆積のあったことが知られた。

次に玉置氏の報告は整地工事が終り、北校舎、中校舎、寄宿舎、雨天体操場の落成を見た37年に鳥居龍藏氏と共に見学された時のレポートで、まだ竪穴住居の断面がのこっていた。

「長野市でみた彌生式土器」—玉置繁雄—

(『東京人類学会雑誌』215号)

題號に掲げた通り、私はこれから昨年鳥居氏と共に北信濃地方へ旅行した時に、其長野市の高等女學校で見て來た彌生式土器に就て、聊か所見を述べやうと思ひます、最も此事に關しては已に蒔田鎭次郎氏が本誌第17卷189號及び全じく190號に「長野市に於ける彌生式土器の發見」と題して報告をせられてありますから、それを是非共參照して頂き度い。

附言、本文起稿の時に際して鳥居氏が材料及注意を與へられました爲に愚論の立脚地を得た事が中々少量でありませんから豫め茲に記して其厚意を謝します。

さて此高等女學校のある地は小字を箱清水と云って、市の北端、山の麓で見晴もよく、彼の有名な善光寺へも右手の方僅12丁の處である。此學校の建設せられたのは23年前の事であるが其當時地均をした時に其所此所に所謂塵捨穴も發見されるし、塵捨穴から彌生式の土器も

發見されたのである、吾々は其當時發掘されたもの並に其以後少し宛集ったものを見て來た譯である、塵捨穴の如何なるものであるかは今も1個横斷面の残って居るのがあるからよく分る、深さ2尺5寸位、長さは3間位、土器の埋まって居る有様も1ヶ所に集って居らずにチラホラ點々散在して居る處が十分分る、其所を寫眞に撮ったのであるが雪や何かの爲に明瞭に出来なかつた、尚ほ同校長の渡邊敏氏が厚意によって人夫を發して吾々の爲に塵捨穴のありそうな所を2時間餘りも縦横に發掘して呉れたのであるけれども土器片1個も得ずして終りました、此現象は或側かぢいへば徒勞に歸したやうであるが然し是によって此地の彌生式の土器は塵捨穴以外に發掘し得られぬといふ事が證明されるのである、然のみならず今迄此所の例に依つても塵捨穴以外よりは出ないといふ事であるから尚更慥に證明は付くし、已に發掘せられた土器の中十中の五六迄殊更に打ちくだいて放棄したらしい形式があつて廢物を棄てたらしい形式は比較的少くないし、今露はれて居る斷面の工合或は土器と同時に木炭或は靱殻の炭などの發掘されているのを以て考へても豎穴に居住して居たもの、残したものとは思へないし、蒔田氏の言の如く製造場とも思へない、其故は製造場として常に伴ふべき物件即竈跡、数枚添着して居る重り焼等一も見えないで只土器の表面コスル爲に用ゐると思へば思はれる石2〜3出づるのみ、此石とても何とやら此土器とは同時代否此土器を製造する時に用ゐられたものでないとは實物を見さへすれば容易に見分けられるし實用でないといふ事は已に蒔田氏の掲げられたる圖に依つても知らるゝ、上殊に朱を多く塗つて然も薄手のものが幾つもあるので知られる。

斯うして考へて見ると製造所説も實用説も此所の例には當てはまらない。

此所に一の面白い事實として現はれたのは他でもない祝部土器の彌生式土器と同時に同所から發掘せられた事である、尤も祝部土器の彌生式土器と同時に發掘せられる事は珍らしい事ではないが其形式及び模様の相似たる點である。

(33は祝部31・32・30・34・35・36は彌生式)……………(中略)……………

ですから今は此所から出た彌生式土器に對しては其祝部土器と同一の使用なる事と云はんとするのである、即祭器説である、固より祝部土器とても古く遡れば實用であつた時代もあらふが今は已に祭器と認められて居る以上は祭器と云つて差支へあるまい、さすれば朱塗の彩色もよからう、薄手なのも解釈が付く、殊に朱塗のは今も三方に朱塗のものもあるを以て見れば思ひ半ばにも過ぎる事である、又其高杯形にスカシのあるのも三方の孔が證明せよう、彼の木炭のあるのも大野氏の説の如くに伊勢神宮の例によって時々焼き棄てたものとすれば差支へがなく、其の土器の量の多いのも其神宮の例より推せば一向差支へる事はない。さうすると此地に何か大きな神社がなければならぬ即日本地理志料卷ノ7、水内郡芋井の條を按ずるに、

(……) 意水内神社在此、……(中略)……神名式水内郡建御名方富命彦神別神社、一名水内神、今在箱清水村善光寺域内、稱年神堂、按善光寺縁起、推古帝時、州人若麻績東人、獲佛像於難波堀江、後建堂於水内郡芋井郷安焉、所謂善光寺是也、栗田寛曰、初東入設寺

于社地、及佛寺益盛、神祠竟衰、僧徒奪其社地、大興堂塔、而本社僅存一小祠、稱年神堂、世不復知其爲官社、唯如來堂今猶行風祭、注連張、年越等神事者、即本社祭儀之遺也……とあるので愈々かめる、右水内神社は今は明治11年善光寺の境内から其東方假寝岡、元本城山といって往時城塞のあった地へ移されてある。

右に述べたかゝりであるから他はいざしらず此高等女學校敷地から發掘された彌生式土器は祭器であると私は云ふのである、が然し此所から出るもの、中に糸底のもの多く出るのを以て見ると彌生式といふ中でも時代は殊に新しいものであらうととにかく時代は祝部土器の行はれて居った末期此方のものであらうと考へる。

以上述べた處は余が一つ信濃で見て來た例に1～2他の知って居る例を加へて此の地に於ける彌生式土器の如何なるものかを論じただけで他の多くの例にまで推し及ぼす事の出来ないのは無論の事であるから一言加へて置きます。

その後、遺物のうち完形を保つものは東京大学人類学教室に贈られたが、それでも多くの遺物は學校に保管されていた。大正14年刊行の『長野市史』には次の様な記述がある。即ち遺物20数点を4段の棚に並べて写真撮影し、その説明として「上より1・2段は古アイノ人使用の土器にて多くは液体を容るる器の破片なり。第2段の中央にあるものは、楕形を存するものにて、土瓶の如きものなり。他は器物の把手なり。皆、高等女學校敷地地ならしの際に出でしものなり。第3・4段は彌生式土器にて、多くは液体容器及その台、漏斗等なり。皆高等女學校敷地より出でたり。同地は彌生式土器を出したることは数において殆本邦第一にて形状の完全なるものは多く東京大学人類学教室に贈れり。

これによると箱清水遺跡からは彌生土器のみならず、縄文中期土器も出土していたことがわかる。又、蒔田・玉置論文からも彌生土器のみではなく土師器も結構多く出土していた。又、『長野市史』の挿図によっても古墳時代の土師器や、高台を有する歴史時代の土器の混在がうかがわれる。

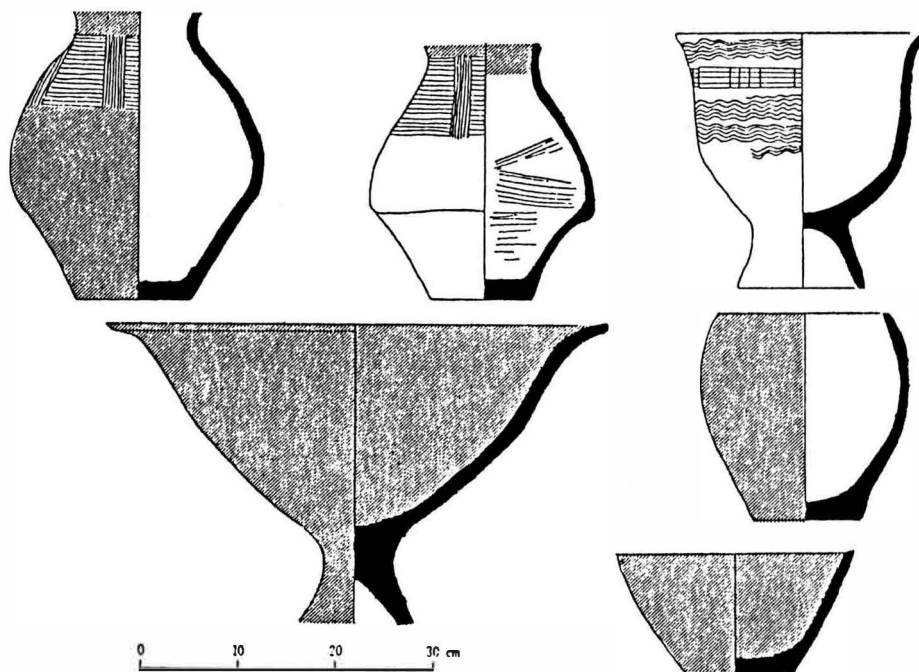
昭和に入って長野高等女學校は14年の火災で収蔵遺物を焼失してしまうが、その前に藤森栄一氏が遺物を実調している。彌生式土器聚成図録作成の時、氏は彌生土器を信濃の彌生後期の標式土器に指定し、「箱清水式」に提唱された。

「信濃の彌生式土器と彌生式石器」— 藤森栄一 —

(『考古学』7-7)

長野箱清水

長野市箱清水が明治の末期長野高女の校庭工事によって發掘たれた際、出土した彌生式土器は完全に近いもののみで数百個に近かったと当時の記録にある程ですから、余程の大遺跡だったに違いありません。それ等は刷毛目をもつ甕とそれに等しい鉢、有孔底の土器、鐙を



第14図 藤森論文掲図土器

もった土器同じ意味の角を持った土器等と又塗丹された円底の壺、碗、高杯、器台等のA・Bの二形態に分けることができました。

前者は粘土は良いのですが、焼成は極めて弱く、薄手でガサガサの粗雑さで、後者は美しく磨かれる場合が多いのです。櫛目文に類した施文も大分ありますが岩村田期のものより大部精彩を失って殆んど整形副作用にすぎません。箱清水では凹石が数個出土しています。信濃全体に及んでこの期の遺跡は最も瀰漫したものの様であります。千曲川上流では岩村田町付近、中込町付近、犀川では松本市南方の低地、出川・清水方面、諏訪湖の橋原、横内、天龍川上流の長岡など共にすばらしく広汎な聚落遺跡の大きなものです。いずれにしても石器は大きな石錘や凹石などの絶対的鈍器の外は注意されておられません。遺跡の断面からは往々竪穴が見出されるのですが、それらは余り大きなものではありませんがその数はすばらしく多く密集しているのが常であります。

この場合の箱清水式中には古墳時代に属する土師器が混入している様である。しかし、弥生後期に位置づけた氏の業績は大きい。

以後、更に20年を経過し、31年には『信濃史料1巻』が編まれたが、ここでは藤森説を継続し、弥生後期の一型式として箱清水式を設定している。

斯様に、箱清水遺跡は伝説のみならず日本の弥生文化研究史上輝くべき位置を占めている。

戦後、学校前庭の整備が行なわれた際に縄文中期と弥生後期の土器片が出土した。この結果、学校敷地の南半分にはまだ遺跡が残っているとの期待がもてた。

昭和53年に同窓会館の改築が決ったので、同校地歴班が発掘調査を行なった。だが地形的に遺跡の東限を越えていて遺構・遺物の発見はなかった。

続いて校舎の全面改築工事が始まり、それに先立って55年に南校舎と中校舎間の中庭にグリッドを設定。その結果、昭和14年火災の廃土埋立層、明治34年校舎建築時埋土層の下に遺物包含層を見出した。南校舎、及び前庭の地表下2.4mに箱清水遺跡の眠っていることが確認できたからである。又、北方は中校舎下まで及んでいることも推察でき、今後、同校舎改築時には調査すべき必要のあることもわかった。

そして、昭和58年の調査で、ついに竪穴住居址1軒を露呈することができた。82年ぶりに学史の中から箱清水遺跡が甦えってきたのである。

遺物量は今回も少なかったが、住居址という遺構に係っての出土なので大きな価値がある。弥生から古墳時代にかけてのヒヤタスをうづめてくれるに相違ない。また、この資料が現代東大人類学教室に眠っている明治34年出土資料に生命を与えてくれる筈である。

(桐原)

箱清水式土器関係文献目録

(正式報告書が発刊されている遺跡の概報は省略した)

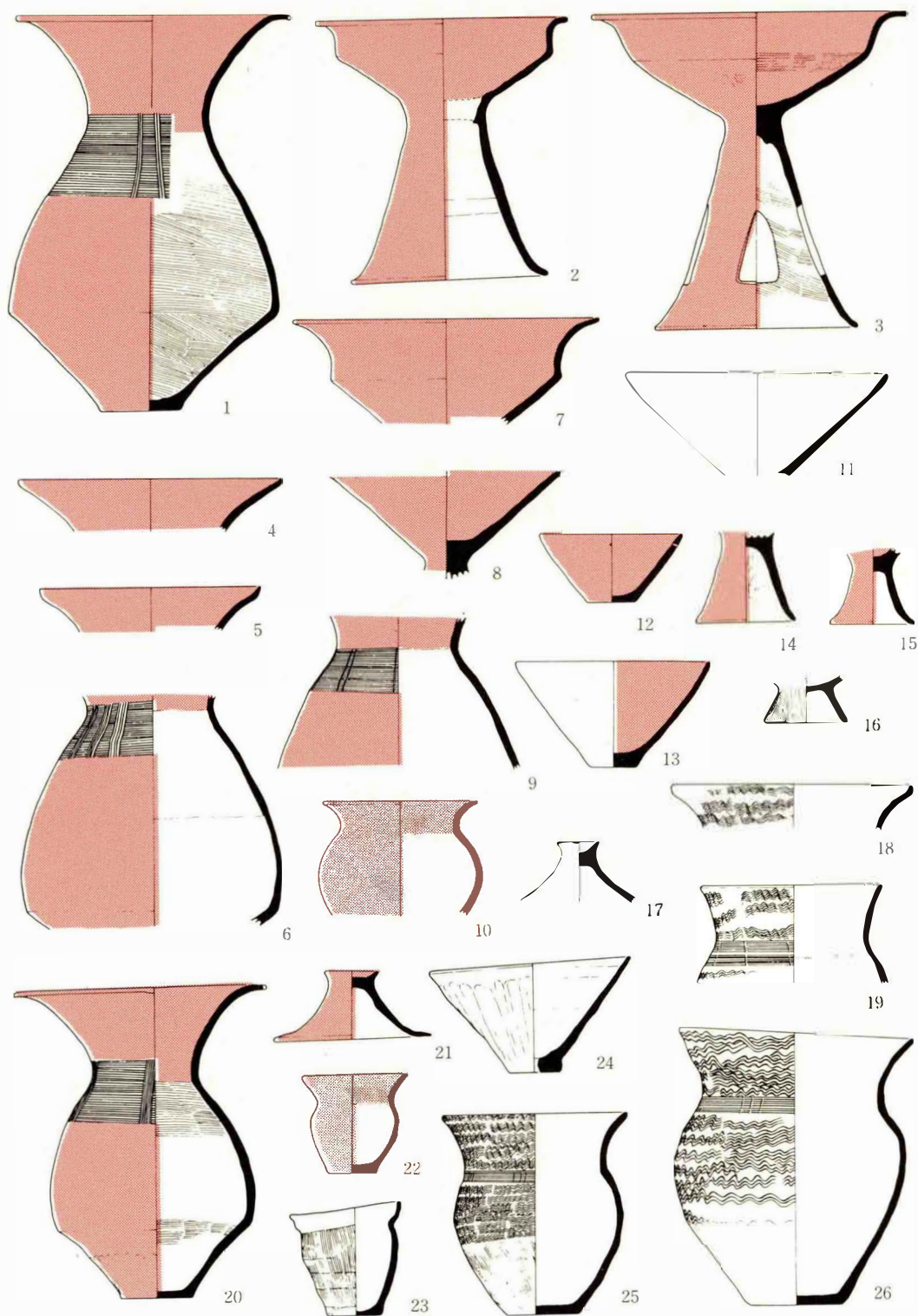
- 1 蒔田 鎗次郎 1901「長野市における弥生式土器の発見」(『東京人類学会雑誌』180)明34
- 2 蒔田 鎗次郎 1901「長野市における弥生式土器の発見(続)」(『東京人類学会雑誌』187)明34
- 3 玉置 繁雄 1904「長野市で見た弥生式土器」(『東京人類学会雑誌』215)明37
- 4 小山 真夫 1920「小県郡の赭色土器」(『信濃教育』403)大9
- 5 長野市役所 1925『長野市史』大14
- 6 小林 行雄 1932「櫛目式文様の分布—弥生式土器における櫛目式文様の研究」(『考古学』3-1)昭7
- 7 森本 六爾 1933「弥生式土器研究史」(『ドルメン』2-2)昭8
- 8 清水 保 1934「朝陽村十二の出土物に就いて」(『信濃』I・3-11)昭9
- 9 八幡 一郎 1934『北佐久郡の考古学的調査』
- 10 神田 五六 1936「北信楽林の弥生式土器」(『考古学』7-7)昭11
- 11 清水 保 1936「柳原村小島出土物(其二)」(『信濃』I・5-3)
- 12 神津 猛 1936「岩村田の弥生式遺跡」(『信濃』I・5-8)
- 13 藤森 栄一 1936「信濃の弥生式土器と弥生式石器」(『考古学』7-7)
- 14 神田 五六 1937「善光寺平の弥生式文化について」(『長野県国民文化講習所所報』3)昭12
- 15 藤森 栄一 1937「千曲川下流長峰・高丘の弥生式石器」(『考古学』8-8)
- 16 森本六爾・小林行雄編 1939『弥生式土器聚成図録』昭14
- 17 五十嵐幹雄 1950「長野県弥生式文化流入の経路試論」(『信濃』III・2-7)
- 18 五十嵐幹雄 1950「信州大学繊維学部保存の弥生式土器」(『信濃』III・2-7)
- 19 神田 五六 1950「東日本における弥生式文化の研究」(『信濃』III・2-7)
- 20 清水 亨 1950「下水内郡外様村東長峰5・6号住居跡発掘調査報告書」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』1)
- 21 森山 茂夫 1950「外様村尾崎東長峰発掘調査報告(1)」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』1)
- 22 森山 茂夫 1950「長峰遺跡群尾崎遺跡7号住居跡発掘報告」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』I)昭25
- 23 寺島 昭夫 1950「下水内郡外様村東長峰3・4号発掘調査報告」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』I)昭25
- 24 高丘小・中学校 1951『安源寺遺跡発掘略報告』昭26
- 25・東 道雄・清水 亨・森山茂夫 1951「下水内郡外様村東長峰3・4・5・6・7号住居址」(『下水内郡遺跡発掘調査報告書』II)

- 26 森山 茂夫 1951「外様村尾崎長峰遺跡 7 号住居址」(『水内会会報』3)
- 27 小野 勝平 1953「下高井の考古学的調査」(『下高井』)昭28
- 28 桐原 健 1953「信濃国間山発見の合口甕棺」(『上代文化』24)昭28
- 29 藤森 栄一 1955「各地域の弥生式土器—中部高地・北陸」(『日本考古学講座』4)昭30
- 30 桐原 健 1956「弥生文化」(『信濃史料』1 卷下)昭31
- 31 桐原 健 1956「箱清水式土器における赤色塗彩の傾向とその意義」(『信濃』III・8-12)
- 32 桐原 健 1956「信濃の後期弥生式土器」(『上代文化』26)
- 33 桐原 健 1957「北信濃長峰丘陵柳町遺跡調査概報」(『信濃』III・9-12)昭32
- 34 高野 行栄 1957「四ツ谷遺跡について」(『埴科教育』5)
- 35 佐原 真 1959「弥生式土器製作技術に関する二・三の考察—櫛描文と回転台をめぐって—」(『私たちの考古学』20)昭34
- 36 桐原 健 1959「北信濃長峰丘陵における弥生式遺跡」(『考古学雑誌』45-1)昭34
- 37 五十嵐幹雄 1959『和村誌』(和村誌編纂委員会)
- 38 田川幸生・桐原 健 1962「長野県安源寺遺跡の弥生式土器」(『信濃』III・14-4)昭37
- 39 桐原 健 1964「稲玉を籠める土器—無頸壺形土器の消長」(『上代文化』34)昭39
- 40 小林 行雄・杉原 莊介編 1964『弥生式土器集成(本編)』
- 41 神村 透 1966「弥生文化の発展と地域性—中部高地」(『日本の考古学』III)昭41
- 42 高橋 桂 1966「北信濃須多ヶ峯弥生式墓壇調査略報」(『考古学雑誌』51-3)
- 43 金井 汲次 1966「長野県中野市安源寺遺跡調査」(『日本考古学協会昭和41年度大会発表要旨』)
- 44 中沢 要・鳥海 弘男 1967「更級郡上山田町力石西沖で検出した弥生後期の一遺構」(『信濃考古』19)昭42
- 45 金井汲次他 1967『安源寺—中野市安源寺遺跡緊急発掘調査報告』(中野市教委)
- 46 永峯光一・樋口昇一 1967「長野県唐沢岩陰」(『日本の洞穴遺跡』)
- 47 神村 透 1968「長野県の弥生文化研究への課題」(『長野県考古学会誌』5)昭43
- 48 桐原 健 1968「手で持ち運ばれてきた土器」(『古代学研究』51)
- 49 丸山敬一郎 1968「長野県菅平陣の岩岩陰遺跡調査概報」(『信濃』III・20-5)
- 50 長野県考古学会 1968「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」(『長野県考古学会誌』5)
- 51 岩崎卓也他 1969『生仁—更埴市生仁遺跡第一次(昭和43年度)緊急発掘調査報告』(更埴市教委)昭44
- 52 竹内 恒 1969「人骨の特殊な出土状態を示す長野県佐久市蟻畑遺跡」(『信濃』III・21-4)
- 53 高橋 桂 1969「北信濃城端遺跡調査略報」(『信濃』III・21-7)
- 54 神村 透 1969「弥生文化各説—中部山岳地帯」(『新版考古学講座』4)
- 55 笹沢 浩 1970「箱清水式土器の再検討」(『信濃』III・22-4)昭45

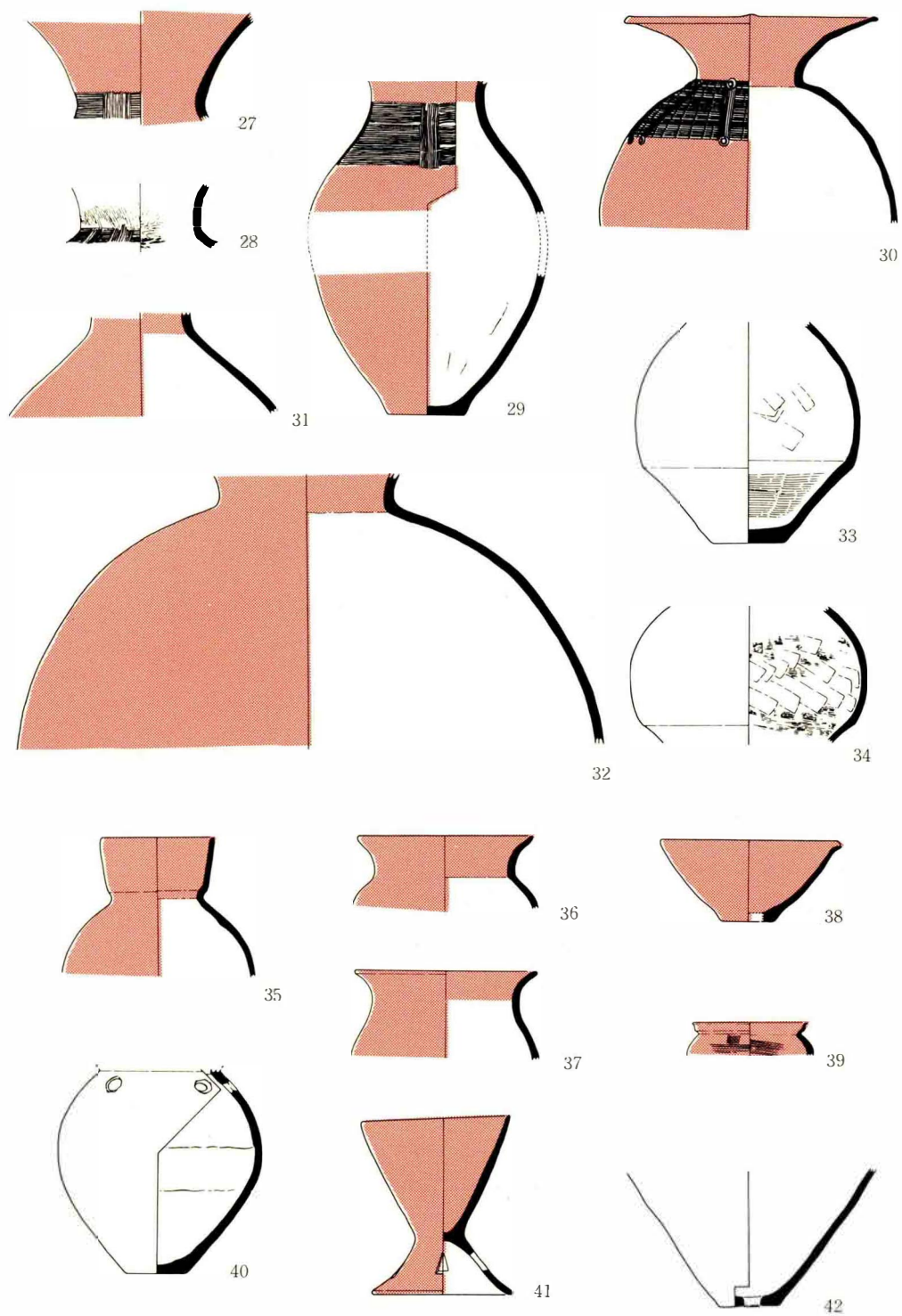
- 56 笹沢 浩 1970「箱清水式土器発生に関する一試論」(『信濃』III 22-11)
- 57 川上 元 1970「上田市上平遺跡緊急発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』8)昭45
- 58 川上 元・小林幹男 1970「長野県小県郡塩田町梓木遺跡」(『信濃』III・22-8)
- 59 小林 幹男 1970「長野県東部町長縄手遺跡」(『日本考古学年報』18)
- 60 桐原 健 1971「北信濃の後期弥生式土器」(『一志茂樹博士喜寿記念論文集』)
- 61 千曲川水系古代文化研究所 1971「長野県更級郡上山田町御屋敷遺跡発掘調査概報」昭46
- 62 長野市教委 1971「平柴平遺跡緊急発掘概報」
- 63 小林幹男・川上 元 1971「上田市西光坊・向田Ⅱ・石原遺跡の調査」(『上小考古』1)
- 64 更埴市教委 1971「下条・灰塚」
- 65 佐久市教委 1971「佐久市新子田戸坂遺跡緊急発掘調査概報」
- 66 佐久市教委 1971「佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報」
- 67 佐久市教委 1972「岩村田一本柳一佐久市岩村田一本柳遺跡緊急発掘調査概報」昭47
- 68 竹内 恒・土屋長久 1972「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』13)
- 69 小林幹男・川上 元 1973「長野県上田市西光坊遺跡・向田Ⅰ遺跡・石原遺跡緊急発掘調査報告」(『長野県考古学会誌』15)昭48
- 70 佐久市教委 1973「岩村田餅田一佐久市岩村田餅田遺跡緊急発掘調査概報」
- 71 竹内 恒・草間富士夫 1973「佐久市新子田戸坂遺跡緊急発掘調査報告書」(『長野県考古学会誌』16)
- 72 臼田 武正 1974「佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報」(佐久市教委)昭49
- 73 丸山敬一郎 1974「善光寺平南縁の自然堤防上の遺跡について」(『信濃』III・26-1)
- 74 日本民俗資料館 1974「信濃の弥生文化展」
- 75 藤森 栄一 1975「箱清水と思い出の人々」(『長野』5)昭50
- 76 桐原 健 1975「赤色塗彩土器の出現」(『信濃』III・27-7)
- 77 笹沢 浩 1975「長野市清野四ツ屋遺跡出土の後期弥生式土器」(『信濃考古』30)
- 78 上田市教委 1975「天神遺跡・山田屋敷緊急発掘調査報告書」
- 79 佐久市教委 1975「三塚鶴田一緊急発掘調査報告書」
- 80 東部町教委 1975「城ノ前遺跡緊急発掘調査報告書」
- 81 三渡俊一郎 1975「S字口縁台付甕形土器出土の遺跡分布に関する私見」(『古代学研究』76)
- 82 森嶋 稔 1975「極小の貯蔵形態の土器」(『長野県考古学会誌』21)
- 83 笹沢 浩 1976「弥生時代」(『上水内郡誌』歴史編)
- 84 飯山市教委 1976「岡峰遺跡緊急発掘調査報告書」昭51
- 85 日本窯業史研究所 1976「屋地遺跡」
- 86 奥水利雄・森嶋 稔 1976「佐久市長土呂出土の弥生式土器」(『長野県考古学会誌』26)

- 87 飯山市教委 1977『岡峰遺跡第2次発掘調査報告書』昭52
- 88 上田千曲高校 1977『上田千曲高校敷地内遺跡発掘調査報告書』22『日考協昭52大会要旨』22
- 89 桐原 健 1977「小布施町中子塚出土土器の様相」(『高井』41)
- 90 高橋 桂・太田文雄 1977「北信須多ヶ峯遺跡第2次発掘調査報告」(『信濃』III・29-4)
- 91 佐久市教委 1977『細田遺跡緊急調査概報』
- 92 佐久市教委 1977『佐久市後沢遺跡調査概報』
- 93 笹沢 浩 1977「弥生土器—中部・中部高地3」(『考古学ジャーナル』134)
- 94 飯山照丘高校 1978『飯山照丘高等学校敷地内遺跡発掘調査報告書』昭53
- 95 森嶋 稔 1978「弥生時代」(『更級埴科地方誌』第二卷)
- 96 桐原 健 1978「箱清水遺跡のもつ意義とその顕彰」(『長野』82)
- 97 西沢寿晃・小松 虎 1978「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について」(『長野県考古学会誌』31)
- 98 中野市教委 1979『安源寺II—安源寺遺跡第三次発掘調査報告書』54
- 99 長野市教委 1979『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の第2次調査報告』
- 100 佐久町教委 1979『宮の本—長野県佐久町宮の本遺跡発掘調査報告書』
- 101 東部町教委 1979『海善寺—長野県東部町海善寺遺跡群発掘調査報告書』
- 102 渡辺重義・森嶋稔・森山公一1979「北佐久郡軽井沢町県遺跡の調査」(『長野県考古学会誌』34)
- 103 上田市立博物館 1979『郷土の歴史—上田の原始・古代』
- 104 桐原 健 1980「信越両国間交流についての考古学的所見」(『信濃』III・32-12)昭55
- 105 豊田村教委 1980『南大原遺跡—上今井橋架け替工事に伴う発掘調査報告書』
- 106 長野市教委 1980『三輪遺跡—三輪小学校地点遺跡、第1～3次調査報告、付水内坐一元神社(柳原小学校)遺跡調査報告』
- 107 長野市教委 1980『篠ノ井遺跡群—大規模自転車道地点遺跡の調査報告』
- 108 長野市教委 1980『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』
- 109 千曲川水系古代文化研究所 1980『編年』
- 110 臼田 武正 1980「佐久地方の後期弥生式土器について」(『信濃』32-4)
- 111 太田 文雄 1980「北信濃の弥生後期編年について」(『信濃』32-4)
- 112 飯山市教委 1980『鍛冶田』
- 113 群馬・長野・埼玉弥生硯器研究グループ 1980『シンポジウム弥生土器—簡描文の系譜』
- 114 桐原 健 1981「弥生後期編年にかかわる一疑問」(『信濃考古』63)昭56
- 115 長野市教委 1981『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
- 116 中野市誌刊行会 1981「農耕文化のおこり」(『中野市誌』)
- 117 坂城町誌刊行会 1981「弥生時代の坂城」(『坂城町誌』)
- 118 林 和男 1981「S字状口縁をもつ土器1例」(『長野県考古学会誌』41)

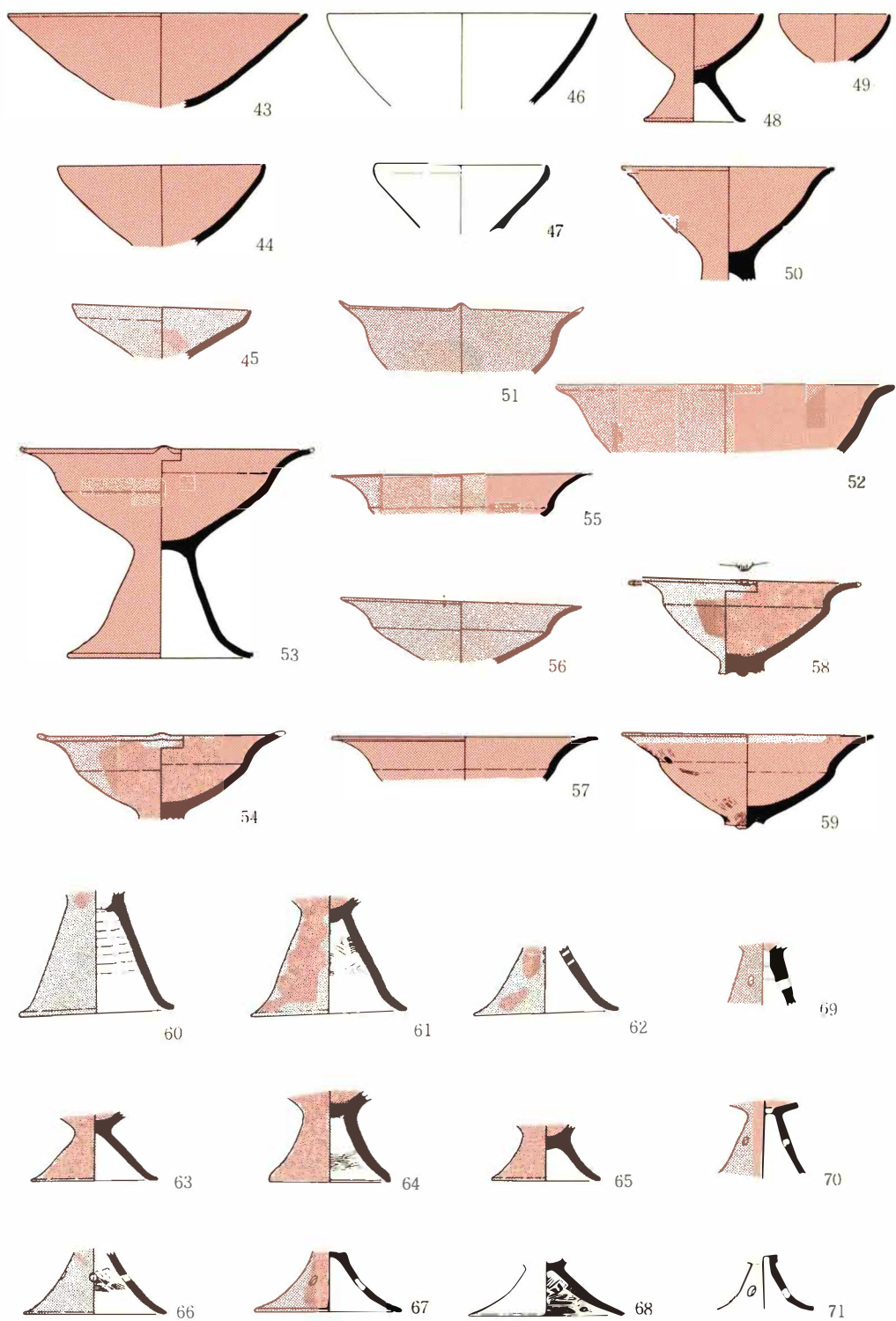
(宮下)



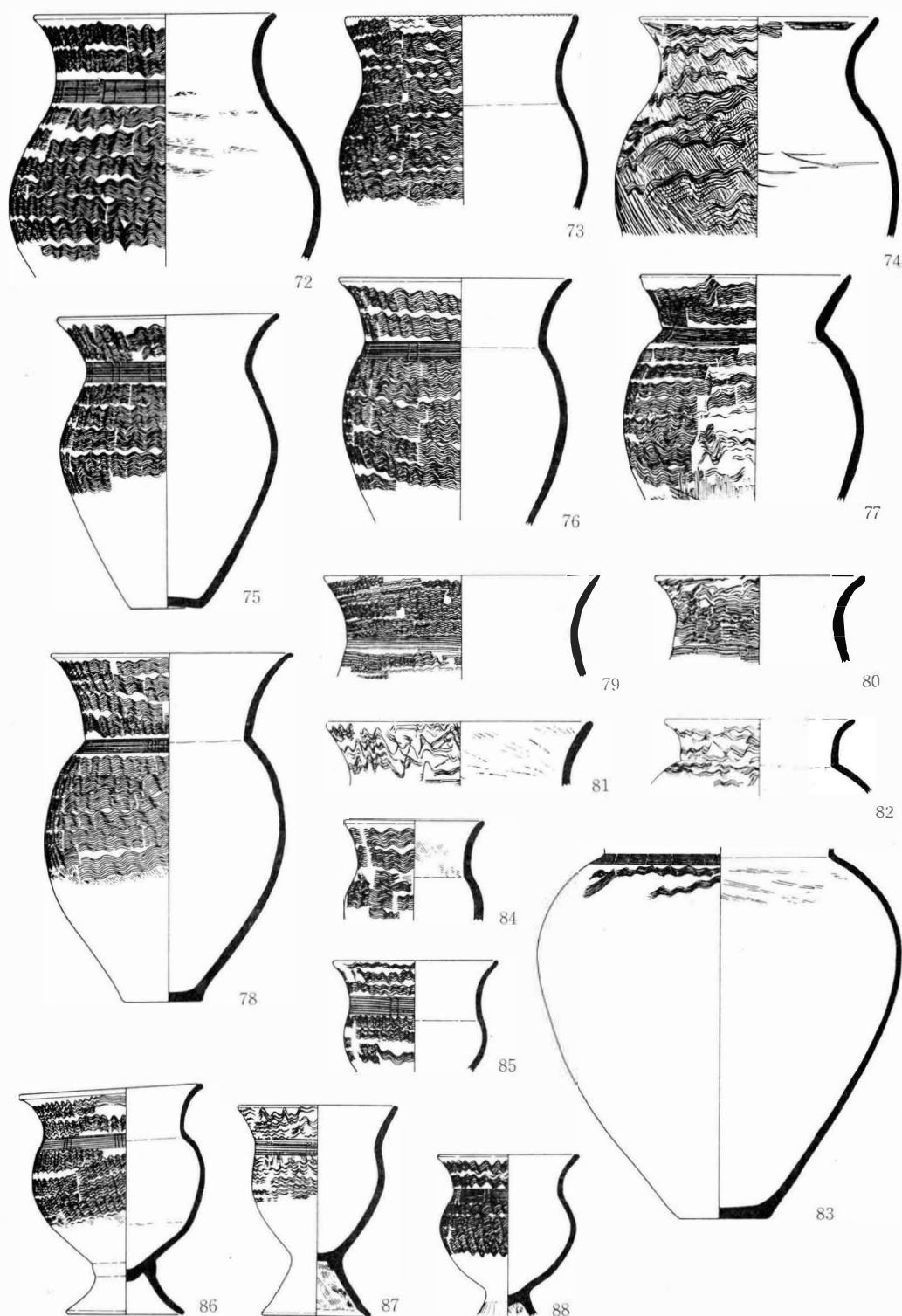
長野市出土箱清水式土器集成 1 (1 : 6)



長野市出土箱清水式土器集成 2 (1 : 6)



長野市出土箱清水式土器集成 3 (1 : 6)



長野市出土箱清水式土器集成4 (1:6)

長野市出土箱清水式土器集成解説 出土遺跡及び文献

神楽橋遺跡 1～3 文献93

篠ノ井遺跡群・大規模自転車道地点遺跡 第19号住居址 4・6・8 文献107

〃 第22号住居址 5・7・9・11・12・14・18・19

〃 第24号住居址 13・16

〃 第25号住居址 10・15・17

国鉄貨物基地遺跡 20～26 文献55

四ツ屋遺跡（清野小学校旧蔵）30 文献77・93

〃 第17号住居址 32・40・42・48・57～59・65・77 文献108

〃 第24号住居址 34・36・55・67・70・82

〃 第25号住居址 72

〃 第26号住居址 54

〃 第27号住居址 38・45

〃 第28号住居址 41・46・50

〃 第30号住居址 33・35・43・53・76・86

〃 第31号住居址 83

〃 第32号住居址 75

〃 井戸址 3 74

〃 包含層 27～29・31・37・39・44・47・49・51・52・56・60～64・66・68・69・71
73・78～81・84・85・87・88

○神楽橋遺跡、国鉄貨物基地遺跡、四ツ屋遺跡（清野小学校旧蔵）出土資料は笹沢浩氏原図により、その他は各報告書原図に基づいた。

○四ツ屋遺跡出土資料には弥生時代末葉から古墳時代初頭に至る段階、いわゆる「御屋敷式」期所産の資料が含まれているが、本集成においては箱清水式の末期的様相として把握した。

○掲載した資料は全て長野市立博物館において保管されている。